

(京都)

あの日の体験 教授伝える

龍大「人々の支援 生きる力に」

阪神大震災で被災した龍谷大の鍋島直樹教授(55)が15日、同大学(伏見区)で営まれた追悼法要で、学生ら約150人に震災体験を語った。

鍋島教授は副任職を務める神戸市中央区の真覚寺で被災し、本堂が半壊。直後の混乱で寺の門徒の安否確認もままならず、亡くなった門徒もいたが、葬儀に参加できなかった。「自分は一体、何をしているんだ」。

無力感にさいなまれ、家族らにも胸の内を明かせず、つらい日々が続いた。

そんな苦境を救ってくれたのが、近くの寺に来ていたボランティアだった。話を聞いてもらうだけだったが、次第に再び歩み出す力が湧いてきたという。

この日、鍋島教授は「被災直後は、これから、どうなるか不安だった」と当時の心境を吐露。それでも、復興に向けて立ち上がり、

「世界中の人たちの支援が生きる力となった」と振り返った。

現在、東日本大震災の被災地で遺族らの思いを聞き取る活動が続ける鍋島教授は、娘を失った宮城県南三陸町の男性の「生き残った者には、それぞれ役割がある」という言葉を紹介。「亡くなった人から受けた愛情

を忘れないでいられるのは生きているその人だけ。どんなに苦しくても闇に光は差してくる」と力を込めた。



自身の被災体験などを語った鍋島教授(伏見区)